



日本産タマムシ科概説 (11)

黒 沢 良 彦

11. *A. carinihumeralis* Y. KUROSAWA, 1964
カタスジナガタマムシ 分布：琉球（奄美大島）。体長4 mm内外。唐金色で翅鞘一面細かい銀灰色または黄色の短毛で覆われる。翅鞘の肩部からほぼ中頃まで明瞭な肩隆線がある。日本産ナガタマムシの中でこの様に長く明瞭な肩隆線を有する種類は他にない。

12. *A. cupes* LEWIS, 1892 ツヤナガタマムシ 分布：日本（本州）。体長5.5~8 mm。青藍色、時に緑を帯びる。アサヒナルリナガタマムシに似るが、光沢が強く、前胸背の形が異なる。G. LEWIS の第2回の採集品に基づいて彼自身によって記載されたもので、原産地は沼田と中禅寺。本州中部の産であるが、最近広島県帝釈峡で発見された。幼虫はミツバウツギにつく。

13. *A. cyaneoniger* E. SAUNDERS, 1873 クロナガタマムシ 分布：日本（北海道、本州、四国、九州、屋久島、対馬）、朝鮮、济州島、シベリア東部、満洲、中国、カシミール。G. LEWIS の第1回の採集品に基づいて記載されたもので、単にJapanとあるだけで詳しい産地がわからないが、LEWIS の第1回採集の足跡から見ると、神戸か長崎のどちらかであろう。体長10~15 mm。原型は全体黒色で前胸背などに紫藍色の光沢があるが、本州中部の山地あたりから銅緑色や銅青色を帯びるものが現われ、その数は寒冷地ほど多くなり、東北地方ではほとんど全部がこの型になる。さらに北上すると、美しい紅銅色を帯びる様になり、北海道では半島部を除いて、全部がこの型になる。一方、翅鞘の色も、原型では黒いが、前胸背の色彩と平行して銅緑色に変わり、東北地方のものは大部分この型になるが、青森県あたりから前胸背に紅銅色が増すにつれて、再び黒くなり、北海道産は大部分がこの型になる。前胸背銅緑色、翅鞘に銅緑色を帯びる型を *f. cupreoviridis* LEWIS, 1892、前胸背紅銅色、翅鞘黒色のものを *f. mikado* OBENBERGER, 1924 と称するが、変異は漸移的で、その間にはっきりした区別がない。従って両型を亜種とすることは出来ない。同様な傾向は後述する *A. tibialis* LEWIS ホソアシナガタマムシ

にも現われる。大陸産は翅鞘の形が異なり、細長なので、別亜種と見做した方がよいであろう。この場合、亜種名はアムールから記載された、*mikado* 型の色彩をした *A. melanopterus* SOLSKY, 1875 を用うべきである。大陸でも、前胸背は日本と似た変化をし、朝鮮でも北部では *mikado* 型の色をしているが、南下するに従い *cupreoviridis* 型の色が多くなる。ただし、翅鞘は常に黒く銅緑色を帯びることはない。济州島や対馬産は大体において *cupreoviridis* 型の胸をしたものが多いが、*mikado* 型も稀ではない。共に日本亜種ではなく、大陸亜種とした方がよいであろう。満洲産は大体において *melanopterus* 型であるが、華北からすでに日本の原型に相当する、前胸背が黒く藍紫色を帯びる *f. marquardti* OBENBERGER, 1914 が現われる。これと同様な型は、カシミールの Gooch's Valley 産の1♀を OBENBERGER の標本の中に見ているから、恐らくこの型は中国本土からビルマ北部、ヒマラヤにも広く分布するものである。シノニムはややく、1879年に J. THOMSON が SAUNDERS の記載に気付かず、*cyaneoniger* と全く同じ日本産の型に、偶然同じ *cyaneoniger* と云う新種名を付けて記載した。1912年に JAKOBSON は模式標本も見ずに *cyaneoniger* THOMSON, 1879 を *cyaneoniger* SAUNDERS, 1873 に先占されているとして、機械的に前者に *jamesi* と云う新名を与えた。しかし、両者は全く同一の種類に偶然に同じ種名を別々に与えただけであって、区別する必要は全くない。また、*melanopterus* SOLSKY, 1815 には *impressifrons* KIESENWETTER, 1879 と *ataman* OBENBERGER, 1924 の二つのシノニムがある。私の以前の扱ひである、1947年の *pseudimitans* MIWA & CHŪJŌ (近畿甲虫同好会々報2, (1), p. 1) 及び1950年の *melanopterus* SOLSKY (日本昆虫図鑑, 1950年版) は共に *mikado* OBENBERGER の誤である。*pseudimitans* MIWA & CHŪJŌ は後述する様に *sinensis* THOMSON のシノニムである。

14. *A. daimio* OBENBERGER, 1936 ダイミヨウナガタマムシ 分布：日本（本州、九州）。体長5 mm内外。よく似た種が数種あるが、内側隆線の形と強く

膨出する前胸背の側縁とで他種からすぐ区別される。小宮次郎氏によるとアブラチャンにつくと云う。

15. *A. discalis* E. SAUNDERS, 1873 ヒシモンナガタマムシ 分布：日本（本州，伊豆諸島，四国，九州，対馬），台湾，カシミア。体長5～8mm。翅鞘の特徴的な斑紋と翅端の形によって他種と紛れることはない。幼虫はエノキやケヤキを食べ，成虫で樹皮下で越冬する。G. LEWIS の第1回の採集品に基づいて記載されたものであるから，原産地は恐らく神戸か長崎。台湾産は側隆線と翅端の形が多少異なる。対馬産も紫銅色で明るく，東京あたりのものとかかなり異なった感がある。カシミアから記録があるのに大陸からは全く記録がない。恐らくは中国の中南部からヒマラヤにかけても分布するものであろう。

16. *A. esakii* Y. KUROSAWA, 1964 エサキナガタマムシ 分布：琉球（奄美大島，沖縄本島）。体長6.5mm内外。一見ウグイスナガタマムシ *A. tempestivus* LEWIS に似た形をしているが，翅端の形が異なり鋭角になる。奄美大島には6，7月頃かなりいるが，沖縄では少ない。

17. *A. fleischeri* OBENBERGER, 1925 フライシヤナガタマムシ 分布：日本（本州），樺太，朝鮮，満洲，シベリア東部。体長10mm内外。原産地はシベリアのマンモスの氷漬け化石の発見で有名な Verozoka で1♂に基づく。黒っぽく翅鞘に各3個の白紋がある。北朝鮮の前胸背が赤味を帯びるものを var. *coreicus* Y. KUROSAWA, 1954 としたが，これは亜種として区別出来るかも知れない。満洲から記載された *A. kochi* THÉRY, 1942 は異名。樺太産は亜種 *kurosawai* OBENBERGER, 1940 として区別されているが，区別の要はないかも知れない。日本産は大型で，内側隆線が弱く，側縁が後方で波曲する点で異なり，亜種 *nipponicola* Y. KUROSAWA, 1963。極めて稀で，私は青森県十和田と鳥取県大山産の♀各1頭を検しただけである。

18. *A. fortunei* LEWIS, 1892 コガネナガタマムシ 分布：日本（本州，四国，九州）。体長8mm内外。明るい真鍮色，緑色や赤味を帯びることもあり，7月頃の生き残りは強く青味を帯びることがある。内側隆線は短いが明瞭。加害植物は多分エノキだろうと推定されるが，確められてはいない。北は青森県十和田地方から九州祖母山に至る各地で得られているが，深山に多い。日本特産種。原産地は日光，中禅寺及び箱根の木質であるが，完模式標本を指定しないので，このうちのどことも決っていない。

19. *A. friebi* OBENBERGER, 1922 クヌギナガタマムシ 分布：日本（北海道，本州，四国，九州，対馬），朝鮮，満洲，アムール，中国。体長5mm内外。模式標本はウラジオストック産の♀。日本産は大陸産のものより暗色で翅鞘の白斑が不明瞭であるので，亜種 *vodaki* OBENBERGER, 1936 に当ると考えていたが，OBENBERGER の模式標本は本種とは異なる種類で，しかもラベルは単に“Ussuri”と

あるだけである。原記載は“De novis Japoniae generis Agrilli speciebus”と云う表題の論文にダイミョウナガタマムシなど日本産の他の3種と共に記載されたもので，もち論産地は Japan と明記されているが，詳しい産地は記していない。この標本は金灰色毛で複雑な模様のある種類で，原記載にある様な「*friebi*に似た」種類では決していない。私は日本産の標本にこれに一致する種類を見たことがない。従って，従来を取扱いを改め，*vodaki* OBENBERGER, 1936 を独立種と見做すが，日本産か否か一応疑問種として取り扱いたい。日本産の *friebi* の亜種名には北海道札幌から記載された *A. ainu* MIWA & CHUJŌ, 1940 を用いなければならぬ。本種も模式標本を台湾で調べることが出来た。中国江蘇省から記載された亜種 *kiangsuanus* OBENBERGER, 1935 は1頭の♀に基づいて記載されたものであるが，基亜種から区別する必要はないと思う。

20. *A. hirashimai* Y. KUROSAWA, 1964 ヒラシマナガタマムシ 分布：琉球（奄美大島）。体長約5mm。短太で，前胸が後縁で最も幅広く，前方に強く狭まる特異な形をしていて，一見チビナカボソタマムシ属 *Nalanda* の或種に似る。翅鞘の後半は銀灰色毛でおおわれる。稀な種類で，加害植物は未知。八重山諸島によく似たナガタマムシが採れるが，或いは同種かも知れない。

21. *A. hornianus* KERREMANS, 1913 ホルンナガタマムシ 分布：琉球（奄美大島，八重山），台湾。体長7mm内外。一見エサキナガタマムシ *A. esakii* に似るが，大型で翅端が円い。また，本土のオオウグイスナガタマムシ *A. asiaticus igai* にも似るが，前胸背の色が異なる。台湾には普通種で全島にいる。奄美大島でも多いが，翅鞘の色と翅端の形が異なり，亜種 *shibatai* Y. KUROSAWA, 1964 に属する。八重山諸島産は台湾のものに近い。沖縄からは記録がない。

22. *A. imitans* LEWIS, 1892 ムネアカナガタマムシ 分布：日本（本州，四国，九州，対馬）。体長7～11mm。前胸が赤く翅鞘が黒い。一見ケヤキナガタマムシ *A. spinipennis* LEWIS に似るが，翅端が円く，鋭く尖らない点で区別出来る。西南日本の産で，原産地は奈良県の柏木，私は長野県産の標本を検したが，一般に中部以北では稀か産しない。九州や対馬では稀な種類ではない。三輪，中条両博士は1936年の目録で本種にアオモンナガタマムシと云う和名を与えたが，本種には青または緑の部分は雄の顔面だけで，とても青紋と称せる部分はないので日本昆虫大図鑑Ⅱで私は上記の名に改めた。

23. *A. insuspectus* OBENBERGER, 1924 ミドリツヤナガタマムシ 分布：日本（北海道，本州，四国，九州），ウスリー。体長5～8mm。光沢のある緑色であるが，西日本には赤錆色を帯びるものが多い。本州中北部の山地には普通であるが，西南日本では少ない。加害植物はカエデ類。原産地はウラジオストックであるので，恐らく朝鮮にも産するであろうが，記録はない。（国立科学博物館）

ハネカクシ漫歩(4)

潮間帯に生息するハネカクシ類

渡辺 泰明

ハネカクシ類は鞘翅目の中で、種類数のきわめて多い代表的な科の1つである。これはとりもなおさず、多種多様な環境に適応し、多くの種に分化してきたことを意味していると思われるが、俗にいう「地の底、水の中」にもその姿を見ることが出来る。「地の底」と形容される地中や洞窟で生息しているハネカクシ類については、前回(Nos.19/20)および前々回(No.4)で紹介したので、今回は「水の中」とでもいうような潮間帯に生息しているハネカクシ類について紹介することにした。

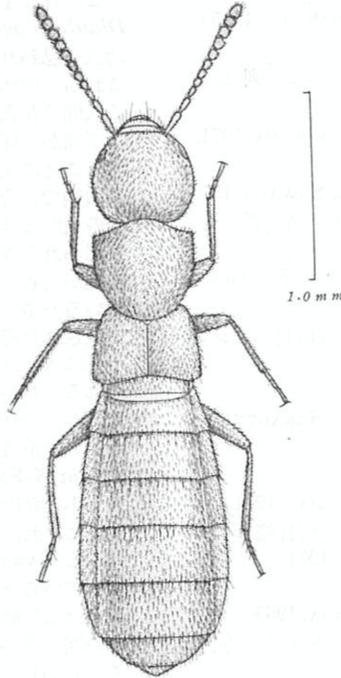
満潮になれば完全に水中に没してしまう潮間帯に生息しているハネカクシ類を、最初に報告したのは徳永雅明博士(1930)である。同博士は紀伊半島の瀬戸海岸における潮間帯の岩礁に生息するヒトエグサガガンボ *Dicranomyia monostromia* TOKUNAGA に関連した昆虫として、*Liparocephalus* および *Diaulota* 両属に含まれる各1種を記録した。そしてこれらの種の概観的特徴や生息環境が、アメリカ大陸の太平洋岸に分布している *L. brevipennis* MAKLIN および *D. densissima* CASEY に、それぞれ類似していることを指摘したが、完全な同定はなされなかった。しかし、後に多数の成虫および幼虫を採集して、同種を検討した阪口浩平博士(1944)は、これらは別種ではなく、*Liparocephalus* 属に含まれる同一種の雌雄の個体であると判断した。しかも本種は従来全く知られていなかった新種であるとして種名を徳永博士に献名し、*L. tokunagai* と記載発表した。さらに、徳永博士と同様に、本種はアメリカ産の上記2種と概観や習性が類似していることをも指摘した。即ち、L. G. SAUNDERS (1928) によってアメリカ産種が、干潮で岩が露出している時には岩の表面を歩き廻り、満潮によって生息場所が海水の水面下になっても、そのためにこれらのハネカクシが水の犠牲になることは決してないという指摘を引用し、*L. tokunagai* も同様な生活をして

いることを暗示した。なお、本種の成虫および幼虫が、春期には潮間帯の岩礁に多数みられ、成虫は岩の窪みで節足動物のヨコエビ類を貪食していることをもあわせ記録し、本種の食性の一端を報告した。

一方、八重山諸島海域の海生昆虫類を調査した江崎悌三博士(1935)は、石垣島と竹富島間に位置し、石垣島の海岸から約5km離れたサンゴ礁で、ハネカクシの1種が採集されたことを報告した。本種は軟体動物の卵塊や海鞘類が群生しているサンゴ礁において、サンゴのかけらの下から3頭採集されたもので、多分新属新種であろうと報告している。また本種の行動は不活発で、日の当たる場所には決して出

てくることはなく、そのためか体色は淡褐色を呈し、体壁の硬化が弱く軟弱で、複眼は小さく縮少し、後翅および腹部気門を全く欠き、海中生活に対する形態的適応を示していることを指摘した。しかしその後長い間本種のカクシの分類学的位置に関する検討は放置されたままで、特異な環境に生息する種として1947年にも、同博士により再度記録された。本種が沢田高平博士により *Brachypronomaea esakii* と命名記載されたのは、本種が発見された後実に20余年を経た1956年で、さらに記載文の後には、江崎博士によって三度生息環境についての記述がなされた。

次いで1955年、沢田高平博士は1953年に行われたトカラ列島海域の科学的調査によって、中之島および宝島の潮間帯より採集されたハネカクシを検討し、3属(内2属は新属)6新種を記載した。また1971年には日本各地の潮間帯から採集されたハネカクシ類を詳細に検討し、1新属5新種を含め4属9種を記載した。しかしその論文では、それまで潮間帯種として報告された *Liparocephalus tokunagai* SAKAGUTI, *Ischnopoda (Stethusa) miyamotoi* K. SAWADA, および *Brachypronomaea esakii* K. SAWADA, の3種については、標本を実際に検視できなかったため全くふれられなかった。



第1図 *Diaulota pacifica* K. SAWADA (真鶴岬産)。

以上が日本の潮間帯から採集されたハネカクシ類に関する報告の概要であるが、それらの種を整理すれば下記の通りである。

Myllaenini

1. **Bryothinusa minuta* (K. SAWADA, 1955)
記録産地：鎌倉（小動崎）、三浦半島（小坪）、伊豆大島、紀伊半島（瀬戸、潮ノ岬、切目崎、友ヶ島）、トカラ列島（中之島）。
2. **Bryothinusa tsutsuii* (K. SAWADA, 1955)
キイロウミハネカクシ
= *B. serpentis* (K. SAWADA, 1955)
記録産地：トカラ列島（中之島、宝島）。
3. **Bryothinusa galgarum* K. SAWADA, 1971
記録産地：鎌倉（小動崎）、三浦半島（油壺）、真鶴岬、伊豆大島、三宅島（渡辺・相馬 [1972] が坪田から記録した *B. tsutsuii* K. SAWADA は本種である）、紀伊半島（切目崎）、宮崎県（青島）。
4. *Bryothinusa nakanei* (K. SAWADA, 1955)
ウミハネカクシ
記録産地：三浦半島（油壺）、トカラ列島（宝島）。
5. *Halorhadinus aequalis* K. SAWADA, 1971
記録産地：紀伊半島（新宮）。
6. *Halorhadinus inaequalis* K. SAWADA, 1971
記録産地：若狭（高浜）、紀伊半島（新宮）。

Pronomaerini

7. **Brachypronomaea esakii* K. SAWADA, 1956
記録産地：琉球（石垣島と竹富島間のサンゴ礁）。
- #### Bolitocharini
8. **Liparocephalus tokunagai* SAKAGUTI, 1944
オオズウミハネカクシ
記録産地：紀伊半島（瀬戸）。
 9. **Diaulota pacifica* K. SAWADA, 1971
記録産地：真鶴岬、紀伊半島（切目崎）。
 10. **Diaulota aokii* K. SAWADA, 1971
記録産地：伊豆大島（元村）。
 11. **Genoplectes uenoi* K. SAWADA, 1955
記録産地：紀伊半島（島島）、トカラ列島（中之島）、徳之島（亀津）。

Myrmedoniini

12. *Ischnopoda (Stethusa) miyamotoi* K. SAWADA, 1955
記録産地：トカラ列島（中之島）。

上記の如く、現在まで4族にまたがる12種が報告されている。これらの種は江崎博士が再三指摘している様に、潮間帯という特異な環境に生息しているためか、共通した形態的適応が認められ、上記のハネカクシの中で種名の前に*印のない *Bryothinusa* 属の1種、*Halorhadinus* 属の2種、および *Ischnopoda* 属の1種を除いた8種は、いずれも後翅が極端に縮小しているか、あるいはほとんど認められな

いほどに退化している。そしてこの様な後翅の退化した種では、同時に複眼も顕著に縮小し、個眼の数は減少して粗くなり、これに反して後翅を持つ種では、複眼は比較的大きく、個眼の数は多く細かい傾向が認められる。またこれら全ての種の大肥は切歯部が良く発達し、左大肥の内縁には小歯を備えているが、臼歯部の発達が悪い。このことはこれらのハネカクシ類が肉食性であることを示し、前述の阪口博士のオオズウミハネカクシの食性に関する記録を裏付けるものである。しかしながら、潮間帯に生息するハネカクシ類の生態的知見は極めて乏しく、今後一層の調査がまたれるが、筆者は昨年2月、多くの潮間帯性ハネカクシ類を採集されている青木忠雄氏の御教示のもとに、真鶴岬でこれらハネカクシ類を採集し、その生息状況を観察する機会を得たので、その折に気が付いた事柄について以下に紹介する。

この日は1時間ほどの短い時間ではあったが、*Diaulota pacifica* K. SAWADA の成虫2頭とその幼虫と思われるもの14頭を採集することが出来た。これらの個体は岬の先端附近の海岸線に累積している人間の頭大からこぶし大位までの大きさの安山岩の下面から採集された。これらの岩は直接地表に接することはなく、いくつかの岩の上に積み上げられた状態で、その下面は下の岩との間に空隙が見られ、岩の表面にはきまってマグマの中のガスが噴出したと思われる多数の小孔が認められ、所々には細かな藻類が附着していた。従ってこの様な環境で生息しているハネカクシ類は、満潮時に岩が海水によって浸漬された場合には、藻類の根元か、あるいは岩の小孔に入り込んで、干潮を待つのではないかと想像される。しかし潮間帯に生息するハネカクシ類の全てが、この様な多孔質の岩にのみ生息している訳ではない。筆者が三宅島の坪田海岸で採集した *B. algarum* K. SAWADA は、波打際に累積したこぶしよりも小さな隙と地表の砂地との間に見られ、また青木氏によれば、油壺の海岸で採集された *B. nakanei* K. SAWADA も、ほぼこれと似た様な環境に生息しているとのことである。従ってこれらのハネカクシは満潮時には隙と隙との間、あるいは隙と砂地との間の僅かな空隙に身を潜めているものと思われる。しかしながら青木氏の御教示によれば、鎌倉の小動崎で採集された *B. minuta* K. SAWADA は、海岸に累積したこぶし大よりやや小さな水成岩の表面に見られ、それらの岩の表面には小孔や窪みは全くなく、しかも藻類の附着も認められず、全体がつるつるした平滑面で、満潮時にはハネカクシがどの様にして海水の浸漬から身を守るのか判断に苦しむとのことである。

次にこれらハネカクシ類の採集時期は、ほとんどが2月～6月と10月の2回の時期に集中しており、盛夏から秋口にかけての採集記録は見当たらない。再三にわたって潮間帯の昆虫類を観察された青木氏も、ナギサズズの成虫が出現する秋口には潮間帯でハネ



第2図 *Diaulota pacifica* K. SAWADA が生息している真鶴岬の潮間帯。

カクシ類を見掛けた経験はないとのことで、これらハネカクシ類の生活史も興味深いものがある。しかし前述の如く阪口博士が春期に成虫および幼虫を一緒に多数採集されたことおよび筆者が真鶴岬で2月に成虫と幼虫を一緒に採集したことを考えあわせると、これらのハネカクシは成虫態で越冬するものと考えられる。

なお、これら潮間帯性のハネカクシが採集された地域は、太平洋では三浦半島以西の各地域、日本海側では若狭湾で、いずれも黒潮海流の流域に限られている様で、この様な分布型を示す好海岸性昆虫には、好んで海蝕洞窟に生息しているウミミズカメムシ

シ *Speovelia maritima* ESAKI がある。従ってウミミズカメムシが発見されている各地での綿密な調査によっては、潮間帯に生息するハネカクシ類に関する、より多くの知見が得られるものと期待される。

最後に真鶴岬における潮間帯性ハネカクシ類の採集観察の折には、藤山家徳先生をはじめ、青木忠雄、田口武、林幸雄、金子秀雄、永田博司等「一商生物部OB会」の方々に多くの御協力を戴いた。ことに青木氏からは真鶴岬の環境写真を戴いたばかりでなく、潮間帯性ハネカクシ類に関する貴重な知見の御教示を得た。ここに上記諸氏に心から御礼申し上げる次第である。(東京農大)

○アオホソゴミムシを本州で採集

アオホソゴミムシ *Drypta ussuriensis* JEDLIČKA は1963年に、チェコの JEDLIČKA によって、彼のまとめた東アジアのアトキリゴミムシ類の論文中で、欧州に産する *Drypta dentata* Rossi の新亜種としてウスリーから記載された、頭部、前胸背が青緑色に輝く美しい種である。その後1967年に土生昶申氏が、日本産アトキリゴミムシの論文に於いて、欧州産のものとは比べかなり形質を異にする点に着目して種に昇格させたが、この折、同氏が検し得た国内での標本は北海道産の2個体であった。筆者等はその後サロベツ原野産のもの等2~3個体見ることが出来たが本州産のものは未だ見た事がなかった。しかし最近下記の標本を検したので記録しておく。

なお、これらの個体は冬期採集の際に得られたものである。

4頭、酒田市(最上川河口), 2. iii. 1964, 桜井俊一採集。

(山形県酒田市, 桜井俊一; 横浜市中区, 奥村 尚)

○神奈川県大山のゴミムシ

下記のゴミムシを丹沢大山で、トラップ採集により得ているので報告する。

1. ニッコウオオズナガゴミムシ *Pterostichus macrogenys* BATES 1♀, 14~19. ix. 1968.
2. *Pterostichus watanabei* TANAKA 2♀♀, 14~19. ix. 1968.

本種は物見峠で採集された1♂のみに基づいて記載された種で、その後の採集記録はなく、雌は未知であった。(横浜市中区, 奥村 尚)

○ニッコウオオズナガゴミムシを鹿教湯温泉で採集

ニッコウオオズナガゴミムシ *Pterostichus macrogenys* BATES は従来中部地方から東北地方にかけての地域の比較的の山岳地帯より得られている種類であるが、トラップ採集で得られる機会は比較的少ない。今回、長野県小県郡鹿教湯温泉(海拔約800m)において、1♂, 1♀を得たので報告する。1973年6月4~10日にトラップに落下したものである。(横浜市中区, 奥村 尚)

日本産 *Pidonia* 属の覚書 (3)

石鎚山の *Pidonia* 属

窪木幹夫

四国第一の高峰、石鎚山は地質学的に西南日本外帯に属し、第三紀層が広く分布し、山嶺は石英粗面岩及び粒状安山岩に被われている。植物相は標高約1700mを境として、上層は亜高山帯でコマツガ、シコクシラベのような針葉樹林、下層はブナのような広葉樹を中心として一部モミ、ツガのような針葉樹を交えた温帯林とに分れている。今回の調査は高知市在住の島本竜一氏によってブナ帯の上限部から亜高山帯を中心に行なわれたもので、各種 *Pidonia* はタンナサワフタギ、クマノミズキ、ニシキウツギ、ショウマ類の花上から採集された。種々御教示頂いた島本氏に御礼申し上げる。

調査年月日 1973年7月11~12日。

調査コース 11日：土小屋(1490m) → 鶴ノ子ノ頭(1640m) → 二ノ鎖元小屋(1800m)。

12日：二ノ鎖元小屋 → 山頂(1981m) → 前日の逆コース → 土小屋。

1. *P. puziloi* (SOLSKY) フタオビノミハナカミキリ 21♂♂, 9♀♀ (1490—1980m)。

2. *P. ohbayashii breuningi* OHBAYASHI et HAYASHI 80♂♂, 20♀♀ (1550—1980m)。

本亜種は前胸の前後縁や上翅の斑紋が黄褐色である点で原亜種(北, 中央, 南アルプス産)と異なる。上翅の斑紋は♂♀ともに比較的安定しているが、その変異を林(1968)に従い区別すると下記ようになる。

ab. *posticeinterrupta* 21♂♂, 4♀♀; ab. *basiinterrupta* 12♂♂, 1♀; ab. *humero-reducta* 15♂♂; f. *typica* 24♂♂, 14♀♀; ab. *humerointerrupta* 8♂♂, 1♀。

斑紋は全体的に見て退色傾向にあり、会合線に沿う斑紋(sutural vitta)が基部付近で分枝し、上翅の基部にある小楯板を囲む斑紋(basal band)とつながる。斑紋の発達した ab. *miyatakei* は♂♀とも採集されなかった。四国における本亜種の垂直分布は亜高山帯に限定され低・中山帯には分布しないと思われる。当地においても、大部分は標高1850m付近で採集された。

○中部地方のクロサワヘリグロハナカミキリの記録

クロサワヘリグロハナカミキリ *Eustrangalis anticereductus* HAYASHI は全国的に分布しており、北海道、九州では比較的採集例が多いが、本州中部での採集記録は少ないようである。筆者は、下記のように、中部地方で採集しているので報告する。

1♂, 24. vii. 1970, 南アルプス二軒小屋付近(1500m), 飛翔中のもの; 1♂, 29. vi. 1974, 大菩薩嶺千石茶屋付近(1200m.), ショウマの花上。

(東京農大, 窪木幹夫)

3. *P. signifera* (BATES) ナガバヒメハナカミキリ 3♂♂ (1490—1850m)。

4. *P. mutata* (BATES) ヒメハナカミキリ 1♂ (1850m)。

5. *P. sp.* 8♂♂, 1♀ (1550—1750m)。

本種は *P. discoidalis shikokensis* CHŪJŌ et HAYASHI に近縁である。林(1969)によれば、*discoidalis shikokensis* の♀の上翅は黒色であるが、標高1650mで採集された♀は、上翅に一对の黄色の縦すじを持つ個体であり、また♀の第七腹部背板の末端は鋭く突出し、かねてから小池寛氏が提唱されているように別種と思われる。本種は他に皿ヶ峰(1000m), 手箱越(1700m)から記録されている。また、九州の高山帯にも分布しているので、紀伊半島を含めた各地の標本を比較検討する必要がある。

6. *P. grallatrix* (BATES) オオヒメハナカミキリ 9♂♂, 2♀♀ (1560—1960m)。

7. *P. simillima* OHBAYASHI et HAYASHI ニセヨコモヒメハナカミキリ 5♂♂, 3♀♀ (1560—1960m)。

8. *P. chujoji* OHBAYASHI et HAYASHI チュウジョウヒメハナカミキリ 9♂♂, 3♀♀ (1490—1960m)。

本種は中部・関東地方及び福島県南部の中・高山帯に分布する *P. oyamae* (OYAMA) と近縁で四国に特産する。♂は上翅の側方に二対の小さな斑紋(latero-basal marking)とlatero-median marking)を持つ個体が典型的なものだが、今回採集された中には、上翅の会合線に沿う斑紋(sutural vitta)が発達した個体もあった。また、♂の前胸の黒色部に退色傾向が見られ *oyamae* と同様に赤褐色の個体も観察された。

9. *P. debilis* (KRAATZ) チャイロヒメハナカミキリ 2♂♂, 2♀♀ (1490—1650m)。

なお、上記9種の採集総個体数は174頭で、それらの性比は♂72%, ♀28%で、最大の優占種は全体の56%を占めた *P. ohbayashii breuningi* であった。(東京農大)

○オオアカバハネカクシの食餌例

ハネカクシ類の中には多くの食肉性種が知られているが、ホストに関しての細かな記録はあまり見られない。筆者は1974年7月17日、午前10時頃、奥日光金精峠附近(群馬県側)の側溝に落ちこんだオオアカバハネカクシ *Agelosus carinatus* SHARP が、死後間もないと思われる、表皮がやや乾燥したミミズの死骸を食べているのを目撃したので記録する。末筆ながらハネカクシの同定をお願いした渡辺泰明先生にお礼申し上げます。(東京農大, 久保田正秀)

IRSNBにあるベニコメツキの標本

大平 仁 夫

筆者は New Ent., 22 (3・4) : 35~40, 1973 誌上において、ベニコメツキ *Denticollis miniatus* (CANDÈZE, 1894), ミヤマベニコメツキ *D. scutellaris* (LEWIS, 1894) 及びヒメミヤマベニコメツキ *D. oculatus* (LEWIS 1894) について、タイプ標本その他について調査した結果の見解を明らかにした。すな

記の文献中で記載をした。

最近、Brussels の Institut Royal des Sciences Naturelles de Belgique (IRSNB) の収蔵品の中に *Lepturoides miniatus* と同定されている標本のあることを知り、それを借用して調べた結果は、これも上記の *D. nipponensis* に相当するものであった。



IRSNB にあるベニコメツキの標本とそのラベル。

わち、G. LEWIS が記載した後 2 者は、いずれも真の CANDÈZE (1885) の *miniatus* の junior synonyms とすべきものであり、G. LEWIS (1894) 以降、E. FLEUTIAUX (1902), Y. MIWA (1934) を初め、すべての日本の研究者が誤って *D. miniatus* と同定してきたベニコメツキに対しては *D. nipponensis* ニホンベニコメツキと新たに命名して、上

しかし、奇妙なことに、図示した如くペン書きの種名ラベルの他に E. CANDÈZE の同定ラベルが付されているが、これらはいずれも CANDÈZE の筆跡ではなく、誰のものであるか明らかではない。筆者はここに、採集者も同定者も不詳なこのようなベニコメツキの標本が IRSNB に保管されていることを明らかにしておく。(愛知教育大)

○新潟県のオオクワガタ

新潟県のオオクワガタは、中村 (1925) が刈羽郡北条から記録し、その後三輪 (1933) が新発田産の 1 匹を図示して以来、今日まで全く記録がない。もっとも、その間樋熊 (1952) および稲原・馬場 (1959) が発表した本県のクワガタ目録には、ともに本種が加えられているが、いずれも上記中村の記録の引用に止まるため、切にその再発見が望まれていた。

筆者は、1961年6月末に新発田市大字田家で、夜間偶然クヌギの木から本種 1 匹を採集 (馬場金太郎氏所蔵) し、次いで7月7日更に同所から 1 匹を採

集した。その後、西英五郎氏も同所で 1 匹を、古山憲治氏は同市岡田で 1 匹を、また本間良夫氏は同市下小松でヤナギから 3 匹を採集して、本種の本県における分布が再確認された。岡田および下小松の産地は数年前の大水害のため完全に流失して、残念ながらそこの採集はもはや望むべくもない。田家の方は1970年7月23日夜、筆者によって、小型ながら 1 匹が採集されているものの、人為的荒廃が甚だしく、絶滅が憂慮される状態である。

(新潟県新発田市, 小池 寛)

○タイワンキンオニクワガタの亜種名

本誌14号誌上で私は中支那から記載された *Prismognathus davidis* DEYROLLE を台湾から記録し、タイワンキンオニクワガタという新名を与えておいた。その際、中国産の *davidis* の標本を見てないから亜種の問題が将来に残る旨を記しておいたが、今回、ベルギーの E. BOMANS とイタリーの PIETRO RATTI 両氏は台湾産のものを新亜種と認め、*P. davidis cheni* という新亜種名を与えた。(Bull. & Ann. Soc. Roy. Belge d'Ent., 109, p. 282—284)。42♂♂, 34♀♀もの多数の台湾産の標本(全部梨山産)を比較に用いているから、間違いはないと考えられる。(東京都世田谷区, 黒沢良彦)

○ダイコクコガネの分布南限

私の見たダイコクコガネ *Copris ochus* MOTSCHULSKY の標本のうち最南限の産地は鹿児島県志布志町(1♂, 20. iv. 1950, 新川勉氏採集)であるが、渡辺徳氏の所蔵標本中にそれよりもはるかに南の口永良部島で採れた標本があるので記録しておく。

1♂, 2♀♀, 鹿児島県口永良部島, 23. vii. 1973, 桜井精氏採集。

採集時の状況は判らないが、恐らくは蛾類採集用の燈火にきたのではないかと思われる。同島には牧場があり放牧の牛が多いという。

(東京都世田谷区, 黒沢良彦)

○日本産コガネムシ類の新分布2題

下記2種のコガネムシは本邦では比較的普通にみられる種であるが、筆者が最近検した個体の中に、未だ記録されていない分布地から採集された個体が含まれていたため、ここに記録する。なお、検視個体に*印が付されているものは筆者が所蔵している標本である。

1. *Glycyphana fulvistemma* MOTSCHULSKY クロハナムグリ

新分布地。屋久島(1♀*, 小杉谷, 4. viii. 1973, 平松優一採集), 石垣島(1♂*, オモト岳, 10. vi. 1972, 植村好延採集); 1♂, バンナ岳, 15. vi. 1971, 岡島秀治採集; 1♀, 19. xii. 1970, 水沢清行採集; 1♂, 27. iii. 1973, 今村佳英採集; 1♂, カビラ, 4. xii. 1971, 水沢清行採集; 1♂, マエシ岳, 6. iv. 1973, 今村佳英採集; 1♀, カワラ山, 28. x. 1963, 平嶋義宏採集), 西表島(1♂, 白浜, 10. iii. 1964, 黒沢良彦採集)。

本種の本邦産(対馬を除く)の個体は、前背板の白斑が比較的少ない型のものが多いが、八重山諸島の個体では、一般に多数の白斑を有する型のものが多いようである。

2. *Protaetia orientalis* GORY et PERCHERON シロテンハナムグリ

新分布地。沖縄本島(1♂*, 沖縄本島, 15. vii. 1970, 採集者不明; 1♀, 那覇, 16. v. 1973, 今村佳英採集)。

野村は1964年(Ent. Rev. Japan, 16 (2): 59),

トカラ列島中之島から得られた1♂に基づいて、*P. orientalis tokarana* を記載したが、今回検することのできた沖縄本島産の個体は、色彩や背面上の白斑および点刻、頭楯の形態等では、本邦産個体の個体変異の幅の中に含まれ、区別することはできなかった。また雄交尾器についても本土産のものとはほとんど変りはない。(東京農大, 小林裕和)

○ハナムグリを天売島から採集

我国におけるハナムグリ *Cetonia pilifera* MOTSCHULSKY の分布地としては、現在までに北海道・本州・四国・九州などが知られており、伊豆諸島には別亜種(*C. pilifera izuensis* NOMURA)が分布している。

最近筆者は、吉谷昭憲氏が北海道天売島で採集された本種を恵与されたので、同氏の御好意にこたえるために下記の通り記録する。

4頭, 天売島(北海道, 留萌支庁), 22. vi. 1971, 吉谷昭憲採集。

体はやや小型で、体上面の軟毛は長く、比較的に密であるが、他産地産の基亜種と区別できるような形態的特徴とは言い難い。なお、これらの個体はキク科の *Erigeron* sp. の花上にて採集された。

末筆ながら、標本を御恵与下さった吉谷昭憲氏に深謝する。(東京農大, 小林裕和)

○福井県のタマムシ類3題

筆者が福井県の山野を歩くようになって12年経つが、その間タマムシ類については少からぬ注意を払って来た。しかし、当県はタマムシ類の豊富な土地ではなく、ここに記録する3種でようやく50種に達した。ナガタマムシ類はもう少し増えそうだし、思いがけぬ珍品に期待をかけると、あと10種くらいは追加できそうである。

1. *Agrilus marcopoli ulmi* Y. KUROSAWA, 1956 アオナガタマムシ

1頭, 福井県大野市嵐地方, vii. 1970, 吉田文孝採集・保存。

北海道から九州まで広く分布するが採集地は限られているようである。福井県でも採れてよさそうだと思っていた所、上記の標本を確認できた。

2. *Trachys tiliae* Y. KUROSAWA, 1959 シナノキチビタマムシ

2頭, 福井県今立郡今立町権現山中腹, 3. v. 1974; 1頭, 同県南条郡今庄町岩谷から夜叉ヶ池に至る溪谷沿いの森林中, 1. vi. 1974; 1頭, 大野市下打波地方, 9. vi. 1974, いずれも筆者採集・保存。

本邦産チビタマムシ類中最大の美麗種で、私の知るかぎり新潟県湯沢町浅貝、福島県会津若松と山形県米沢からの記録しかない珍稀種である。かねがねコレクションに加えたいと念願していた虫であるが、今年になって上記のように続けて3地域から採集することが出来た。権現山のはクロモジの葉上、岩谷のは下草に止まっていたもので近くにシナノキは見当らず、異った樹種を食草にしているのかと思ったが、

下打波のは正しくシナノキの葉縁を食害していた。

3. *Coraebus ishiharai* Y. KUROSAWA, 1953

サビナカボソタムシ 1♀, 福井県武生市若須岳, 23. vi. 1974, 赤松学採集, 筆者保存。

同行した赤松君(福井大学学生)が叩網によって採集し, 昼食時に見せられ驚き帰路入念に探したが追加個体は得られなかった。広島県道後山, 鳥取県大山, 福岡県福智山, 東京都高尾山から記録されているが, 稀種の一つであろう。原記載(♂のみ)と比較すると, 二次性徴である後脛節端の鋭歯を欠くほか, 翅端がより鋭く尖り, 上翅後方の波状毛斑の形が若干異なるが, その他の重要と思われる特徴でよく一致する。体長。13.0mm。

貴重な標本を快く提供された赤松学君と発表を委ねられた吉田文孝君(当時福井大学学生)にお礼申し上げます。(福井大学教育学部, 佐々治寛之)

○イソジョウカイモドキの分布北限

イソジョウカイモドキ *Laius asahinai* NAKANE は最初鹿児島県佐多岬で発見記載された, 海岸の潮のかかる岩礁に住む種類である。太平洋側では神奈川県三浦半島に至る海岸の岩礁で発見されているが, 日本海側では, 私の知る限り, その産地を知らない。しかし, 昨年(1973), 新潟県北部の山形県境近くの海岸で本種を採集したので分布北限の記録として記録しておく。

1♂, 8. viii. 1973, 新潟県岩船郡山北町今川, 笹川流れ, 黒沢良彦採集。

採集場所は満潮時には汐をかぶるような風化した花崗岩の岩礁上で, 正午近く, 快晴の日光の直射で灼けるように熱くなった岩礁上の凹みをはっていた。その後よく注意したが他の個体は見当らなかった。

(東京都世田谷区, 黒沢良彦)

○マダクロホシタムシ 2 種

(1) 昨48年6月24日, 三重県尾鷲市八鬼山に登っての帰り, 夕暮の濃い中で路傍のアカメガシワ葉上に虫影を認めネットに入れたところマダクロホシタムシ *Ovalisia vivata* LEWIS であった。そこでアカメガシワを見るたびにすくって歩き, さらに2頭を追加した。翌25日は快晴に恵まれて九木岬を往復したが, ほとんどのアカメガシワ葉上に何頭かの本種がとまったり, 翅をきらめかせて葉上に飛来したり(旋回しているものは見なかった)していた。そのうち14頭を採集して帰宅し, 前日のものと合わせて雌雄を検したところ8♂8♀9♀であった。九木岬には大きな杉の植林があったがそこでは伐木, 倒木が見当らなかった故か本種を認めることはできなかった。黒沢良彦先生にお話したところ, そういう生態例は未知のことなので報告しておく。

(2) 本年7月20日正午ごろ, 福井県南津郡館岩村の鱒沢入口から安ヶ森森林道を1キロほど入った道路わきの草むらに, スギを主にヒメコマツ, アカマツ等をまじえた材木が20本ほど転がしてあるのを見つけた。近よった途端材から飛び立とうとしている本種

(1♀)を発見し危うく手づかみにした。東北地方での採集例は岩手県陸中ほかごく少いはずで, 福島県では初の記録となろう。

(福島大学経済学部, 田添京二)

○タカハシトゲゾウ新潟県に産す

本種 *Dinorhopala takahashii* (KONO) は, 翅鞘後半部に多くの円錐状突起を装うとともに, 急に肥大した後肢腿節端に鋸歯状突起を有する特異な形態のゾウムシである。稀な種であるらしく, 従来知られている産地は, 本州では原産地である東京(奥多摩)の外, 山形・群馬・埼玉のみである。筆者は1970年5月31日, 新潟県岩船郡関川村大字沼の山林で, 1頭は藪の, もう1頭はヤマザクラの beating によってそれぞれ採集した。更に新発田市東赤谷(本間良夫採集)および水谷沢(伊丹英雄採集)の各1頭をも検しているため, 新潟県未記録種として報告する。(新潟県新発田市, 小池 寛)

○オガサワラチャイロカミキリ福井県に産す

Comusia testacea (GRESSITT, 1937) オガサワラチャイロカミキリは小笠原群島から記載され, 最近になって九州佐多岬, 屋久島, 奄美大島, 沖縄, 石垣島が分布につけ加えられたが, 佐多岬以外では九州, 四国, 本州のいずれからも記録されず, *Comusia* 属自体も東南アジア, フイリピン等に分布し, *testacea* はその北限種である。所が, 1973年7月19日, 福井県雄島においてタブの枯木上で本種を採集した。福井県西部から海岸にそって暖帯照葉樹林が所々に発達し, 暖地性昆虫が散見されるが, 本種の既知分布地から考えると, 日本海側で採集されたのは注目に値しよう。琉球列島からの直接渡来は考えにくいので, 対馬あたりで生息していて, それが海流に乗って雄島にたどりついたと憶測されるがどんなものだろうか。なお, 雄島はタブ・ヤブニッケイの原始林として特別保護区に指定され, 動植物の採集は一切禁止されているが, 福井県より自然環境保全基礎調査を委嘱され特別許可を得て採集に立入ったものである。

Comusia 属の分類学的位置については Methiini 族に所属させていることが多いが, GRESSITT(1951), 林・小島(1969)などの検索表に示された特徴では *Comusia* は Methiini に該当しない。特に後者には *Comusia* を Methiini に入れて検索表を作成しているにも拘らず行きつかないのである。この件につき林 匡夫氏に問合せた所, 同氏もそのことにつき既にお気付きの様子で, 検討中とのことであった。また, 種の同定については分布から考えて別種の可能性があるため, 草間慶一氏に標本を送って, 小笠原や琉球のものと比較していただいた所, 差異は見出せないとの御返事をいただいた。御教示いただいた林, 草間両氏にお礼申し上げます。

(福井大学教育学部, 佐々治 寛之)

○八丈島産コバネカミキリの記録

本邦に分布するコバネカミキリは2亜種に分けら

れ, ssp. *insularis* は文字通り屋久島や奄美大島などの島々に分布し, 伊豆諸島の御蔵島からも記録されている。また, 八丈島からは本種の上翅のみが発見され, その生息が予測されていたが完全な採集記録はなかった。最近, 筆者は前波鉄也氏から八丈島で採集された本種を恵与されたので, ここに記録し同氏の御厚意にむくいたい。

1 ♀, 三根, 八丈島, 28. viii. 1972, 前波鉄也採集。

なお, 本採集個体は御蔵島産の個体にくらべ, 頭部複眼間の縦溝がより深いこと以外は形態的な差異はないようである。(東京農大, 渡辺泰明)

○宮城県未記録の甲虫 2 種

1. クロヒラタシデムシ *Phosphuga atrata* LINNÉ
2 ♂♂, 2 ♀♀, 鬼首峠, 25. xi. 1967, 渡辺徳採集。朽木中で越冬中のものを採集した。北隆館の原色昆虫大図鑑Ⅱでは分布が北海道, 本州になっているが, 本州からの確実な記録がないと聞く。

2. ホソオオクチキムシ *Allecula cryptomeliae* LEWIS

1 ♂, 刈田郡蔵王町馬ノ上山, 5. v. 1968, 渡辺徳採集。

本州中部から知られた種類で, 恐らくは東北地方から最初の記録であろう。(仙台市, 渡辺 徳)

○カミキリムシ 2 種の生態記録

1. アカメガシワの花にきたキマダラカミキリ。
1970年7月21日(快晴), 東京都八王子市高尾山のケーブルカー上駅付近で, 午前10時頃アカメガシワの花に止まっていたキマダラカミキリ1♀を採集した。この時は3~5mくらいの距離から目撃したが, 花に頭をつっこんでいる様な格好だった。花粉を食べていたかどうかは, はっきりわからないが, 本種が花にきた事は面白いと思う。なお当日他に, 薬王院付近で飛来して来たアオカミキリ1♀, クチキオオハナノミなどを採集している。

2. ヌマガシワの樹液にきたテツイロヒメカミキリ。

テツイロヒメカミキリ *Ceresium sinicum* WHITE が樹液にきたという記録を聞かないが, 1969年6月12日(曇ときどき小雨), 東京都台東区上野公園内の国立科学博物館付近の林の中で, ヌマガシワの樹液に多くのシロテンハナムグリと共に来っていた本種を採集した。この木は直径40~50cmくらいで, テツイロヒメカミキリは2mくらいの所に止まっていた。なお同公園では, 6月10日に偶然, 捕虫網の中にはいていた本種を採集し, 6月13日にはピーティングでケンカミキリを1頭採集している。

同公園で採集したテツイロヒメカミキリはどちらも夕方4時~5時頃の間である。末筆ながら, ヌマガシワを同定して下さった国立科学博物館奥山春季先生に厚く御礼申し上げる。

(東京都台東区, 藤田 宏)

○双翅目幼虫に卵を産みつけたツマキアオジョウカイモドキ

ジョウカイモドキ科 Melyridae の幼虫は昆虫を捕食することで知られている。ツマキアオジョウカイモドキ *Malachius prolongatus* MOTSCHULSKY



の幼虫も枯木や草の茎の中にあけられた昆虫の孔道から発見される。筆者は本種が神奈川県神武寺で写真Aに示すように枯れたササの先端に産卵管を挿入しているのを観察した(12. v. 1969)。飛び去った後, 産卵部の内部を調べたところ, 写真Bに示すように双翅目幼虫のからだに2粒の卵がくっついていて, 幼虫を茎からとり出したので卵をつけたままでの飼育はできなかったが, 湿ったろ紙に置いた卵からツマキアオジョウカイモドキが孵化した。

本種の産卵に関しては福田 彰(1949)及び筆者(1959)の記録がある。福田の観察ではノイバラの枯枝の中に8粒内外をかためて産みつけている。筆者はクズの枯れた蔓の中への産卵を記録。今回の双翅目幼虫への産卵は偶然なのか否か, 明らかではないが興味あることがらとしてここに記録する次第である。(横浜市港北区, 林 長閑)

○糞に來集したコカブトムシ

コカブトムシは従来から朽木中や樹液のしみ込んだ土中などから採集されることが知られ, また夜間採集でも得られている。筆者は1972年7月に, 奄美大島八津野で乾燥した牛糞下より3♀♀を採集しているので報告しておく。どれも日光の直射をうけたかなり古い牛糞で他の糞虫類は全く見られなかった。また, 数年前に奈良公園内でやはり乾燥した鹿糞から数頭得たことがある。(東京農大, 岡島秀治)

○コカブトムシの共食いについて

コカブトムシの生活については、岡田俊典(1969:インセクタリアムム, 6巻1号)の報告に詳しく記述されており、幼虫、成虫共に食肉性が強いと報告されている。

筆者は、1974年6月7日、埼玉県秩父市でカブトムシ幼虫を採集中、コカブトムシの蛹3頭と成虫1♂1♀を得た。これらの個体は、腐ったオガクズ(ブナ等広葉樹のオガクズで約3年経ている)の中に入っていたものであるが、不注意にも、全個体同一の容器にオガクズを入れ持ち帰った為、蛹3個体は途中で成虫にかじられ、傷ついでしまい、ひどいのは蛹の半分を食べられてしまった。

残った成虫1♂1♀を前記のオガクズを入れた容器に入れ、採卵の目的で飼ったが、餌として与えたりんごの切片を良く食べていたにもかかわらず、蛹と同様に雌個体が食べられてしまった。

これらの結果は、岡田氏の報告と同様で、可成り食肉性が強いことを示しており、植物性の餌のみでは、十分な飼育が行なえない事も示しているものと思われる。

なお、蛹化の際の脱皮がらは、完全に脱がず、ベニヘリテントウの蛹のように、蛹腹面についていた。併せ報告しておく。(豊島園昆虫館, 黒田敏明)

○オトシブミ類の越冬

大変古い話で恐縮であるが、本誌19/20号に黒田敏明氏がオトシブミ類の越冬について書いておられるので、私の昔の記録を引き出して記してみたい。

1936年(昭和11年)の冬、当時の山形県米沢市では旧家が道路の側に山のように薪材を積み上げ、薪割りをする習慣があった。私の家の近くの旧家も、カミキリムシの食痕で材が空洞化したような栗の材を積んで薪割りを始めたが、傍で見ていると、面白いようにいろいろな昆虫が転り出て来る。その中にアシナガオトシブミ *Phialodes rufipennis*, ルイスアシナガオトシブミ *Henicolabus lewisii*, ルリオトシブミ *Euops punctatostriata* などのオトシブミ類が各数頭ずつ混っていた。特に前2種は同一の場所に数頭がかたまって越冬していたように憶えている。ルイスアシナガオトシブミはその後ケヤキの皮下に越冬しているのをよく採集したが、これは本種がケヤキの新梢を捲くからであろう。アシナガオトシブミはその後越冬中のものを得たことがない。ルリオトシブミはその後もあちこちでケヤキ其他の樹皮下や枯木の皮下などで得ている。

なお、この薪割り場で得た甲虫には他に、コアオマイマイカブリ *Damaster blaptoides montanus*, オオアオモリヒラタゴミムシ *Colpodes buchanani*, 多数のカメノコテントウ *Aiolocaria hexaspilota*, オオクチキムシ *Allecula fuliginosa*, クチキムシ *A. melanaria* などがある。中でも、コアオマイマイカブリの出現は後に私がマイマイカブリの朽木中越冬を文献に頼ることなく推定発見する時の基にな

った事件で、私には忘れられない思い出である。

(東京都世田谷区, 黒沢良彦)

○ドロハマキチョッキリの成虫越冬

ゾウムシの中には成虫越冬するものが少なくないが、筆者は1969年11月30日新発田市外の焼峯山の標高約400m附近において、かなり乾燥した杉の切株上部から越冬中の本種1頭を採集した。中根猛彦博士の御教示によれば、*Byctiscus*などはヨーロッパでは、幼虫は成熟すると葉から離れ土に潜って蛹になり、7・8月頃羽化するがそのまま止まって翌春現われる由である。本例はその越冬場所からみて果してそこで羽化し春を待っていたのか、単に越冬のため潜りこんだのか明らかではないが、未だ我が国におけるこのようなチョッキリ類の越冬の記録を知らないので報告する。その際ヘリアカデオキノコも1頭採れたので附記する。御教示ならびに両種の御同定をいただいた中根博士に深謝する。

(新潟県新発田市, 小池 寛)

○対馬のハネカクシ(ハネカクシ科分布資料 2)

対馬産ハネカクシ類に関する記録は1922年に、M. BERNHAUER 博士によって、命名記載された *Echiaster japonicus* が嚙矢と思われる。これは標本商の Karl Rost 氏が、1907年に採集した個体によったものであるが、1936年および1938年には STAUDINGER の採集品に基づいて、さらに2新種の命名記載が同氏によって行われた (*Philonthus conicus*, *Gyrophaena tsushimana*)。

一方、日本人による記録は江崎悌三・堀浩・安松京三(1938)により、オオアカバコガシラハネカクシおよびサビハネカクシの2種が記録されたのみである。従って、これら上記の記録を合わせると現在まで対馬からは5種のハネカクシが知られているに過ぎないことになる。

しかしながら、筆者の手許にある須賀邦耀および渡辺信敬両氏から恵与されたハネカクシ類の中に下記のと対馬からの未記録種が含まれていたもので、ここに記録し両氏の御厚意に報いたい。なお、採集地名の佐. および敵. は、佐須奈および敵原の略である。

1. *Anotylus laticornis* (SHARP)
1頭, 敵. 9. vi. 1964, 渡辺信敬採集。
2. *Rugilus rufescens* (SHARP) クビボソハネカクシ
1頭, 佐. 10. vi. 1964, 渡辺信敬採集。
3. *Isocheilus staphylinoides* (SHARP) ニセトガリハネカクシ
1頭, 佐. 10. vi. 1964, 渡辺信敬採集。
4. *Megalinus mixtus* (SHARP)
1頭, 佐. 10. vi. 1964, 渡辺信敬採集; 1頭, 佐. 30. vii. 1968, 須賀邦耀採集。
5. *Megalinus suffusus* (SHARP) キバネナガハネカクシ
6頭, 佐. 10. vi. 1964, 渡辺信敬採集。

6. *Othiellus medius* (SHARP) ウスアカバホ
ソハネカクシ
1頭, 佐. 10. vi. 1964, 渡辺信敬採集。
 7. *Philonthus (Philonthus) tardus* KRAATZ
ヘリアカバコガシラハネカクシ
7頭, 佐. 10. vi. 1964, 渡辺信敬採集。
 8. *Philonthus (Bisnius) rutiliventris* SHARP
ムネスジコガシラハネカクシ
3頭, 佐. 10. vi. 1964, 渡辺信敬採集。
 9. *Ocybus (Xanthocybus) weisei* HAROLD
キンボンソハネカクシ
1頭, 佐. 10. vi. 1964, 渡辺信敬採集。
 10. *Liusus hilleri* (WEISE) カタモンハネカクシ
2頭, 敵. 9. vi. 1964, 渡辺信敬採集; 5頭,
佐. 30. vii. 1968, 須賀邦耀採集。
 11. *Quedius (Quedionuchus) japonicus* SHARP
アカバツヤムネハネカクシ
3頭, 佐. 10. vi. 1964, 渡辺信敬採集。
 12. *Sepedophilus simulans* NAKANE et K. SAWADA
1頭, 敵. 9. vi. 1964, 渡辺信敬採集。
 13. *Sepedophilus germanus* (SHARP)
ムクゲヒメキノコハネカクシ
1頭, 佐. 10. vi. 1964, 渡辺信敬採集。
- (東京農大, 渡辺泰明)

◇会員の皆様へ (投稿規制の緩和)

「甲虫ニュース」も本号をもって22号を数えるまでに成長致しましたことは、会員諸氏の御熱意と御協力の賜物と心から感謝致しております。既に御承知の通り、本誌は発刊当初から啓蒙的な解説記事および資料的価値のある短報を主内容として参りましたが、種々の事情から印刷頁が制約され、その結果として不本意ながら会員諸氏からの投稿を約1,000字以内に限定し、原著的内容の投稿は御遠慮願って参りました。しかしながら最近になり、会の運営もどうやら軌道に乗り、ニュースの増頁も可能となって参りましたので、一部会員からの要望にも応える意味から、従来の投稿の規制を解除することに致

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号 (各号 100本 160円)

なお、無頭針00号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

しました。従って、今後は随時増頁を行い、増頁分の紙面は甲虫類に関する綜説、同定の便を図るための近縁種類の解説、さらには生態的観察記録等に費やしたいと考えております。どうか会員諸氏もこの意図を了とされ、積極的な御投稿を御願ひ申し上げます。ただし、新種等の記載は従前通り、本誌の対象外ですので御遠慮願ひます。(世話人一同)。

計 報

会員和泉泰吉氏は今年(1974)1月24日急性肺炎のため57才で急逝された。謹しんで哀悼の意を捧げる。

氏は戦前台湾に在り、蝶や甲虫の記録にもしばしばその名を見る知名の士で、特にクワガタムシ類を熱心に集められていたが、惜しくも戦火により焼失した。戦後、茨城県筑波郡谷田部町に引き上げられたが、クワガタムシへの執念止み難く、再び標本集めに熱中され、1972年7月には奄美大島と徳之島に、1973年5・6月には沖縄本島と八重山諸島にクワガタムシ採集の旅行をされ、今年には念願の台湾に再び赴かれる予定であったと聞く。しかし、若い人たちと一緒にの強行採集で無理をされたのであろうか、琉球での採集品を整理される間もなく、風邪から急性肺炎を併発され眠るように亡くられたという。

氏が戦後再び集められた標本は、クワガタムシ科だけで719点、すべて氏の遺言によって御遺族を通じ国立科学博物館に寄贈され、永久に保存されることになった。

昨年、西表島で氏と共に採集をする機会を持つことが出来たが、これが氏との最後の出会いとなってしまった。まことに寂しい限りである。心から御冥福を祈る。(黒沢良彦)

甲虫談話会

会費(1カ年) 1000円, 次号は12月中旬発行予定,
投稿メ切は10月30日

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電 (364) 2311, 振替 東京 60664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥4,500, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都内及び第一地帯: 3箇以下 ¥750, 4個以上 ¥650 (以下同様), 第2地帯 ¥850, ¥650, 第3地帯 ¥950, ¥750. 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 811-4547